

見巧者

蒼穹

内言十深 表現  
相手は自分

テカまる (表現・先頭)  
止まる (伝達・中肉)  
止め・ポケット

梶井基次郎

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土

堤の上で日を浴びていた。空にはながらく動

かないでいる巨きな雲があつた。その雲は

その地球に面した側に藤紫色をした陰翳を

持っていた。そしてその尨大な容積やその

藤紫色をした陰翳はなにかしら茫漠とした

悲哀をその雲に感じさせた。

語りかけ

私の坐っているところはこの村でも一番広  
いとされている平地の縁に当たっていた。山  
と溪たにとがその大方の眺めであるこの村では、  
どこを眺めるにも勾配のついた地勢でないも  
のはなかった。風景は絶えず重力の法則に脅  
かされていた。そのうえ光と影の移り変わり  
は溪間にいる人に始終あわただ慌しい感情を与え  
ていた。そうした村のなかでは、溪間からは  
高く一日日の当るこの平地の眺めほど心を休  
めるものはなかった。私にとってはその終日

日に倦あいた眺めが悲しいまでノスタルジック  
だった。Lotus-eater の住んでいるという  
いつも午後ばかりの国——それが私には想像  
された。  
すまんです。

雲はその平地の向うの果である雑木山の上  
に横よこたわっていた。雑木山では絶えず杜鵑ほととぎす  
が鳴いていた。その麓ふもとに水車が光っている  
ばかりで、眼に見えて動くものはなく、うら  
うらと晩春の日が照り渡っている野山には静  
かなもの懶うさばかりが感じられた。そして雲は

なにかそうした安逸の非運を悲しんでいるか  
のように思われるのだった。

私は眼を溪の方の眺めへ移した。私の眼

の下ではこの半島の中心の山彙からわけ出て

来た二つの溪が落合っていた。二つの溪の間

へ楔子のように立っている山と、前方を

屏風のように塞いでいる山との間には、一

つの溪をその上流へかけて十二単衣のような

山褶が交互に重なっていた。そしてその涯

には一本の巨大な枯木をその巔に持って

いる、そしてそのため<sup>に</sup>ことさら感情を高め  
て見える一つの山が聳<sup>その</sup>えていた。日は毎日  
二つの溪を渡ってその山へ落ちてゆくのだっ  
たが、午後早い日は今やつと一つの溪を渡っ  
たばかりで、溪と溪との間に立っている山の  
こちら側が死のような影に安らっているのが  
ことさら眼立っていた。三月の半ば頃私はよ  
く山を蔽<sup>おお</sup>った杉林から山火事のような煙が  
起こるのを見た。それは日のよくあたる風の  
吹く、ほどよい湿度と温度が幸いする日、杉

林が一斉に飛ばず花粉の煙であった。しかし  
今すでに受精を終わった杉林の上には褐色が  
かった落ちつきができていた。瓦斯体ガスのよう  
な若芽に煙っていた樗けやきや檜ならの緑にももう初  
夏らしい落ちつきがあった。開けた若葉がお  
のおの影を持ち瓦斯体のような夢はもうなか  
った。ただ溪間にむくむくと茂っている椎しい  
の樹が何回目かの発芽で黄な粉をまぶしたよ  
うになっていた。

そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、

二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、しりしり不知識しりしりそのなかへ吸い込まれて行つた。湧き出て来る雲は見る見る日に輝いた巨大な姿を空のなかへ拈げるのであつた。

それは一方からの尽きない生成とともにゆつくり旋回していた。また一方では捲きあがって行つた縁へりが絶えず青空のなかへ消え込むのだった。こうした雲の変化ほど見る人の心に言い知れぬ深い感情を喚よび起こすものは

ない。その変化を見極めようとする眼はいつ  
もその尽きない生成と消滅のなかへ溺れ込  
んでしまい、ただそればかりを繰り返してい  
るうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだ  
ん胸へ昂ま<sup>たか</sup>って来る。その感情は喉<sup>のど</sup>を詰ら  
せるようになって来、身体からは平衡の感じ  
がだんだん失われて来、もしそんな状態が長  
く続けば、そのある極点から、自分の身体は  
奈落のようなもののなかへ落ちてゆくのでは  
ないかと思われる。それも花火に仕掛けられ



た紙人形のように、身体のあらゆる部分から力を失って。――

私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう言った感情のなかへ巻き込まれていった。

そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところ

が、影になった杉山のすぐ上からではなく、

そこからかなりの距へだたりを持ったところにあ

ったことであつた。そこへ来てはじめて薄うつつ

り見えはじめる。それから見る見る巨おおきな

姿をあらわす。――

私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというよう不思議な気持ちに捕えられた。そのとき私の心をふとかすめたものがあつた。それはこの村でのある闇夜の経験であつた。

その夜私は提灯ちようちんも持たないで闇の街道を歩いていた。それは途中にただ一軒の人家しかない。そしてその家の燈ひがちようど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている。

大きな闇のなかであつた。街道へその家の燈のが光を投をげている。そのなかへ突然姿をあらわした人影があつた。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いてきた村人だつたのである。私は別にその人影を怪しいと思つたのではなかつた。しかし私はなんとということなく凝つと、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負つた光をだんだん失いながら消えていった。網膜だけの感じになり、闇のなか

の想像になり——ついにはその想像もふつ  
り断ち切れてしまった。そのとき私は『何  
処』というもののない闇に微かな戦慄せんりつを感  
じた。その闇のなかへ同じような絶望的な順  
序で消えてゆく私自身を想像し、言い知れぬ  
恐怖と情熱を覚えたのである。——

その記憶が私の心をかすめたとき、突然私  
は悟った。雲が湧き立っては消えてゆく空の  
なかにあつたものは、見えない山のようなも  
のでもなく、不思議な岬みさきのようなものでも

なく、なんという虚無！ 白日の闇が満ち充ちているのだということ。私の眼は一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い藍色あいいろに煙りあがったこの季節の空は、そのとき、見れば見るほどただ闇としか私には感覚できなかつたのである。